

ホーソーンの逆説的表現の意味するもの

長岡政憲

はじめに

聖書のイエスの教えの中にはパラドックスのような意味を持つ教えが多く見受けられる。「マタイによる福音書」の山上の垂訓、

Blessed are the poor in spirit for theirs is the kingdom of heaven. Blessed are they that mourn : for they shall be comforted.⁽¹⁾

から始まり、He that findeth his life shall lose it: and he that loseth his life for my sake shall find it.⁽²⁾等随所に見受けられるのである。表面的には理解し難く、教えの真意を理解するのも困難であり、しかしながら人々の心に強い印象を与えているのは間違いない。これはこの教えを聞く対象者や読む対象者に強い衝撃を与えるための逆説法を使ったものではなく、その教えの中に地上の世界と天上の世界の大きな違いを民衆に悟らせようとした意図が想像できよう。

ホーソーンの代表的な短編の“Young Goodman Brown”では、若い夫のブラウンが悪魔の誘惑によって一夜の森の悪魔の集會に引き寄せられている。その集會にセイレム村の尊敬する牧師や信仰深い信者達が参加している様子を見せられ、自分の父や母もその怪しい人々の仲間のおり、彼らの歌う賛美歌は悪魔的なものだと思った時、黒い衣を纏った悪魔がブラウンに声をかける。

At the word, Goodman Brown stepped for the shadow of the trees and approached the congregation, with whom he felt a loathfull brotherhood by the sympathy of all that was wicked in his heart.⁽³⁾(筆者下線)

として、内心は良心が制止しているのに悪魔の仲間入りするという、相反する感情の撞着語表現が、憎悪感と兄弟愛の入り混じった複雑なブラウンの感情を印象的に且つ効果的に表現している。

この逆説的表現の衝撃をホーソンは作品の中に織り込み、読者に強い印象と深遠な意味を持たせる手法が、“Rappaccini’s Daughter”に見られ、本稿ではこの作品からホーソンの逆説的表現の効果について探っていきたい。

“Rappaccini’s Daughter”はラパチャーニ博士の非現実的な毒の草花の庭園を舞台にしており、毒と生命、美と醜、死と永遠など、対比しているテーマが豊かに描かれており、難解ではあるが読み応えのある作品である。イタリアのパドバは中世以前の古い町であるが、そのパドバ大学のラパチャーニ博士は最先端の薬学研究にとりつかれている。医学生ジョバンニが下宿として住むことになる隣の古い邸宅はかつてパドバの貴族が住んでいたと思われる。その家の先祖がダンテの地獄篇の永遠の苦しみを味わったと思わせるような陰気な館である。隣接するラパチャーニ博士の邸の庭園の様子は、裕福な家族の遊園地を思わせるもので、庭園の中央にある池のある噴水の見事な彫刻はひどく壊れているものの、噴水は水音を響かせ、勢い良く流れて日光に反射し、水音の響きは隣のジョバンニの高い部屋の窓まで聞こえ、大理石の噴水は一世紀はそのままの姿で、二世紀目以降に彫刻の飾りが壊れかかっているとされている。ここでホーソンは古い邸と噴水は形を留めながらも、その家の住民の世代交代の生命の有限性と、噴水から流れ続ける水の永遠性を比較しようと意図していると思われる。

この豊かな自然の水の養分を吸って、この人工的な植物庭園の池の真ん中

には、一本の低木が紫色の鮮やかで豪華な花を咲かせており、まさに宝石の輝きであった。実はこの美しい花がこの庭園の中で最も毒性が強く、一番手入れの行き届いている毒花である。周囲の草花のあるものは、“... some crept serpent-like along the ground or climbed on high, using whatever means of ascent was offered them.”⁽⁴⁾としてこれらの植物がラパチャーニ博士の手によって創られたか育てられている故に、この科学者の所属の使いが蛇のイメージとして備えられている。

ジョバンニが自分の部屋の窓のところに立っていると、この毒の庭園の主ラパチャーニ博士が植物の茂る葉のカーテンから姿を現す。彼が栽培している草花の華麗さに比べ、彼は病人のように青白くやつれ、白髪混じりで黒装束の中に知性と教養、そしてそれぞれの植物を鋭く観察する熱心さは類のないものであった。その彼が手入れをしている植物の様相は *savage beast, deadly snakes, or evil spirits*⁽⁵⁾ というものである。この庭園の最も美しい低木は最も恐ろしい毒の吐息を発し、その美しさは *deadlier malice*⁽⁶⁾ を隠しているようだとしている。そのため、ラパチャーニはその危険な花の手入れをこの家にずっと隔離している娘のピアトリスに任せているのである。ピアトリスはその美しい紫色の花で輝いている低木と同様に、紫色あるいは深紅色の豊かな美しさで装い、生き生きとした活気に満ち、“...beautiful as the day, ...redundant with life, and energy;”⁽⁷⁾ という美しくも毒の乙女である。

ラパチャーニ博士が恐る恐る避けている美しい花をつけている低木には顔にマスクをかけ、手に厚い手袋をつけて観察していたのだが、その低木の世話を任せられた娘のピアトリスは、対照的にその毒の花の低木を抱擁するように顔を寄せ、その花の発する毒の香りを吸い込むのである。つまり彼女にとっては “as the breath of life”⁽⁸⁾ なのである。彼女の愛情溢れる優しさは毒の花を愛おしく思う気持ちで一体化しているのである。ホーソーンは、

Flowers and maiden were different, and yet the same, and

fraught with some strange peril in either shape.⁽⁹⁾

と語っており、花とピアトリースの美しさと毒性は同じであっても、その危険性が形状にあるとしている。この花はラパチャーニ博士の手による人工の毒花であり、ピアトリースの美しさは見る側のジョバンニにとっては避けられない程の魔力となるものである。

医学生のジョバンニは、自分の父の古い友人であるバリオーニ教授に父からの紹介状の手紙を持って表敬訪問に行く。心の温かさを微塵も顕さないラパチャーニ博士と異なり、バリオーニ教授は優しく陽気で、トスカナ産ワインを飲みながらジョバンニを夕食でもてなす。

ジョバンニがバリオーニ教授からラパチャーニ博士のこと、娘のピアトリースのことを個人的に親しく聞いた後、自分の下宿に戻り窓から庭園を見下ろしていると、期待通りにピアトリースが以前眺めていた時よりも増して美しく優しい姿で現れた。彼女は噴水のところへ行き、あの紫色の美しい毒の花を抱き、毒の香りを慕い胸いっぱい吸い込んだのである。彼女はその花に自分の姉妹のように語りかけている。その花の折れた茎から落ちる一、二滴が彼女の足元を通りかかった蜥蜴の頭のかかり、蜥蜴は身悶えして死んでしまう。ピアトリースは驚きもせず、悲しげに十字を切り、躊躇うこともなくその花を胸に飾るのである。更にこの庭に美しい蝶が舞い込んで来て美しい花の香りに引き寄せられ、ピアトリースの頭上を舞っていたが、急に彼女の足元に落ちて死んでしまう。ピアトリースの吐息が蝶にかかったようである。

この光景を上窓から見つめていたジョバンニだが、ピアトリースと視線が合うことになり、下宿への帰り道に買っていた新鮮な花束を挨拶代わりに上から彼女へ投げ、ピアトリースの関心を引こうとする。お礼を言ってその場を立ち去ろうとする彼女の手の中で、今差し出された花束が急に萎れ始めたのである。(ホーソーンは遠くからそれを見分けるのは不可能であるかのように濁しているが)その光景を見つめていたジョバンニに強く与えた印象は、美しい花と死の毒、美しいピアトリースと死の吐息の同一性なのである。

彼女がジョバンニの身体に浸透させたものは、

It was not love, although her rich beauty was a madness to him; nor horror, even while he fancied her spirit to be imbued with the same baneful essence that seemed to pervade her physical frame, but a wild offspring of both love and horror that had each parent in it, and burned like one and shivered like the other.⁽¹⁰⁾
(筆者下線)

としてホーソーンは love と horror の類似性、あるいは同一性のテーマの問題提起をしている。この二つの相反する感情は何故に類似あるいは同一の様相を有していると言えるのであろうか。この愛はジョバンニが豊満な美しいピアトリースに対して抱いている感情であり、彼女の表情の simplicity and sweetness⁽¹¹⁾を慕い求めている彼の側からの love である。horror とは死に至る毒の美しい花と同一の毒性が彼女の全身とその呼吸している息であり、ジョバンニが近づいて愛したいが、近づけない死の恐怖である。更にホーソーンは、

Giovanni knew not what to dread; still less did he knew what to hope; yet hope and dread kept a continual warfare in his breast, alternately vanquishing one another and starting up afresh to renew the contest. Blessed are all simple emotions, be they dark or bright! It is the lurid intermixture of the two that produces the illuminating blaze of the infernal regions.⁽¹²⁾ (筆者下線)

と明確な宣言をしており、love が hope に変わり、ピアトリースの豊かな美しさと内面の優しさを希求し、horror は dread に変わっていくが、その二つの相反する感情はジョバンニの心の中で絶えず盛り上がり、争い戦い続け

るというのである。loveは思いを寄せているピアリトースに近づきたい感情であり、horrorは恐ろしいfatal poisonの存在である彼女から離れなければならない感情である。そのためにジョバンニは逆行する二つの感情の一方だけを選択することができない不自由な、解放されない引力で縛られることになる。この自由を失ったジョバンニの心はまさに⁽¹²⁾下線の“the lurid intermixture of the two”であり、心の中で争い合う二つの感情が、“the illuminating blaze of the internal regions.”「地獄の燃え輝く炎」を生み出すとホーソーンは印象づけている。注目すべきはその文体で、筆者は本稿の冒頭で取り上げた、“Blessed are the poor in spirit: ...Blessed are they that mourn:”⁽¹³⁾というイエスの訓話の書き出しと同じであるが、山上の垂訓の教えでは、全ての単純で単一の感情は祝福され、幸いであるとされている。その根拠は旧約聖書の詩篇12章で、

“They speak vanity every one with his neighbour: with flattering fail lips and a double heart do they speak. The Lord shall cut off all flattering lips, and the tongue that speaketh proud things.”⁽¹⁴⁾(筆者下線)

として、ダビデが神に向かって嘆きの祈りをする中で、人々の二心からくる災いを訴えている。山上の垂訓の後半でイエスは、

“No man can serve two masters: for either he will hate the one, and love the other; or else he will hold to the one, and despise the other.”⁽¹⁵⁾

と明確に相反する二つの感情、二心があってはならないこととして戒めていることが想起されよう。

ジョバンニの心の錯乱は、毒の花の香りを吸い込んでいるピアトリースの

姿、毒の花の茎からの水滴で死んでしまう蜥蜴、ピアトリースの吐く息で舞い落ちて死んだ蝶、ジョバンニが差し出した花束がピアトリースの手の中で直ぐ萎れていく様。これらの光景を窓から見て恐怖心に駆られながらも、庭園でのジョバンニは目の前のピアトリースに対し、

“And must I believe all that I have seen with my own eyes?” asked Giovanni, pointedly, while the recollection of former scenes made him shrink. “No, Signora; you demand too little of me. Bid me believe nothing save what comes from your own lips.”⁽¹⁶⁾

として、真理探究の科学者を目指す医学生の資質を欠く二心を露呈している。ジョバンニのピアトリースに対する love と horror の相反する感情の結末はこの作品の終わりの部分でまとめることにしたい。

下宿先のリザベタ老婦人の金貨目当ての下心もあっての案内で、隣のラパチーニ博士の庭園への秘密の入口に入っていくジョバンニにとってはホーソンが、

The instant that he was aware of the possibility of approaching Beatrice, it seemed an absolute necessity of his existence to do so. It mattered not whether she were angel or demon;⁽¹⁷⁾

として、自分の相反する二つの感情をコントロールできないジョバンニは妄想ではないと自己正当化しながらも、心半分躊躇いつつ毒の庭園に入ってゆく。まさに passion が彼を誘い、ピアトリースの東洋的な美しさを目の当たりに接したいと胸をときめかしている。この庭園の様相はこの世のものとは思えないような、植物の種族間で姦淫がなされたと思われる人工の怪しい美しさで、墮落した邪悪な空想の産物であると描かれている。

庭園で出会ったジョバンニはピアトリースと語り始めると直ぐピアトリー

スの虜になり、以前に見たビアトリースの毒性の恐ろしさを超えて彼女の魅力の輪の中に入り込んでしまうのであり、最早疑惑も恐怖心も感じない熱病にかかってしまう。二人は楽しそうに語りながら例の最も美しい毒の花に近づいていく。ビアトリースがお礼にと高い窓にいるジョバンニに投げようとしたその花の記憶も理性も忘れた彼は、その花を自分の手で摘み取ろうとした瞬間、ビアトリースがつい彼の腕を掴んで制止することになる。この一瞬の接触によってビアトリースの毒がジョバンニの体内に感染したのである。ジョバンニの夢心地の中でその後何度か毒のエデンの園で二人の語らいが続くことになる。

ビアトリースの美しさに心を奪われたまま、毒のことなど忘れかかっていたのだが、パリオニ教授が彼の下宿に来て彼の毒の感染を察知して警告し、ジョバンニの感染とビアトリースの毒性からの救済にと、解毒剤の水薬の小瓶を置いて帰ることになる。まさか自分の体内に毒が感染しているとは思ってもいない彼はビアトリースに贈った花束が彼女の手の中でもう一度萎れるかを改めて確かめようと、庭園で彼女に会う直前に買っておいた花を握って階段を降りようとした時、“A thrill of indefinable horror shot through his frame…”⁽¹⁸⁾ (筆者下線)とあり、恐怖の戦慄が駆け巡る。花束が彼の手の中で萎れ始めたのである。更に巣作りをしている蜘蛛に自分の息を吹きかけると蜘蛛は痙攣して死んでしまったのである。怒りと絶望感のあまり美しく純粋なビアトリースを殺したくなる思いを抑え、彼は庭で彼女と会うのである。ホーソーンはここでビアトリースのイメージについて、*holy and passionate, …the pure fountain, …transparency, …a heavenly angel.*⁽¹⁹⁾ として描いている。彼女はジョバンニの心の変化を直感し、二人の間には暗闇の深淵があることに気づく。

ジョバンニはビアトリースから、美しい毒の花は父親ラパチーニが創造したものであり、その花の姉妹のように毒の香りで育てられた恐ろしい運命を打ち明けられた時、彼の怒りについて、“Giovanni’s rage broke forth from his sullen gloom like a lightning flash out of a dark cloud.”⁽²⁰⁾

(筆者下線)としてホーソンの反意語的で鮮明な表現が見受けられる。ジョバンニは人生の全ての温かい世界から“…region of unspeakable horror”⁽²¹⁾の世界へと運命づけられたのである。ビアトリスを醜い憎悪すべき恐ろしい怪物だとして扱い、彼女に口に出せない憎しみのキスで一緒に死のうと持ちかけるが、バリオーニ教授から手渡された解毒剤の薬瓶を思い出し、二人で飲もうとする。

ビアトリスにとっては、最早ジョバンニの醜い恐ろしい憎悪に満ちた心で罵りの言葉を浴びせられた以上、愛の対象ではなくなり、自分の死を予期してか、自分から先に毒の体内に解毒剤を飲み入れる。そこに現れたラパチャーニ博士はこの二人を毒のエデンの園のアダムとイヴにしようと企んでおり、二人を祝福しようと言うのである。死の直前にビアトリスは、父親が娘に背負わせた悲惨な運命とは決別し、死の毒の世界から解放され、父親に別れを告げて天上の世界へ昇天してゆくと言いつ残す。ジョバンニには私の毒の本性よりも貴方の邪悪な本性の方が最初からもっと毒があったでしょう、と告げて死んでゆく。

この毒の花園をホーソンは、“Was this garden, then, the Eden of the present world?”⁽²²⁾と作品の始めに暗示しており、ラパチャーニ博士がこの庭園でジョバンニとビアトリスを明確にアダムとイヴに仕立て上げる策略でお膳立てしていたのである。最期にビアトリスが、

I am going, father, where the evil which thou hast striven to mingle with my being will pass away like a dream-like the fragrance of these poisonous flowers, which will no longer trait my breath among the flowers of Eden.⁽²³⁾(筆者下線)

として言及したエデンの花は地上のこの毒の花園ではなく、毒も悪をないパラダイスのエデンの園を意味していることは疑いなかろう。

この作品のエデンの園では、ビアトリスが蛇の誘惑に陥ったイヴではな

く、ジョバンニにとっての愛と恐怖の対象であったビアトリスが、触れることも食することもできなかった禁断の実であろう。彼女の毒性を認識していながら二つの相反する感情の中で、熱情から誤った選択をしたために彼はビアトリスの生命を奪うことになる。ビアトリスの今際の際に彼は邪悪な罪の毒性を指摘され、彼女から完全に見捨てられる結果になる。

さて、

“Doubtless, like wise, the fair and Signore Beatrice would minister to her patients with draughts as sweet as a maiden’s breath; but woe to him that sips them!”⁽²⁴⁾(筆者下線)

という表現を最後に取り上げるが、これはジョバンニの部屋を訪れ、その部屋で毒の香りを感じ取ったバリオーニ教授がビアトリスの毒性について言及し、彼女に近づき関わる人物を患者と見立て、嘆きの呟きを吐露しているが、この文体は「ルカによる福音書」でイエスが、

“Woe to you, Chora’zin! woe to you, Beth-sa’ida! For if the mighty works done in you had been done in Tyre and Sidon, they would have repented long ago, sitting in sackcloth and ashes.”⁽²⁵⁾
(筆者下線)

として、降りかかる災いを嘆いて語った言葉であるが、「コラジン、ベツサイダ、カファルナウムという三つの町への災いの叙述の言明は、イエスと弟子たち、あるいはそのいずれがそこで宣教したことを前述としている。またこの災いの叙述は、その地で宣教の力強い働きがなされたが、総じて悔い改めは見られなかったことも前提としているのである。」⁽²⁶⁾と解説されている。バリオーニ教授がジョバンニに語りかけたこの嘆きは、ビアトリスの美しい魅力に引き寄せられたジョバンニの避けられない結末について、ホー

ソーンがイエスの言い回しをそのまま引用して宣言した形となっていると考えられる。

おわりに

この作品は反語的、対比的な語、つまり美と醜、毒と生命、生と死、有限と永遠、地上と天上などの対比が見事に描かれているが、その逆説的表現効果は聖書の英文の文体から取り込んでいる手法を垣間見ることができよう。

注

- (1) Matthew. 5: 3,4. (Authorized King James Version) による。
- (2) Matthew. 10: 39. (Authorized King James Version) による。
- (3) Nathaniel Hawthorne, Mosses from an Old Manse, ed. William Chavat and Others, (Ohio State University Press, 1974), X, p. 86.
以下このテキストを *M.O.M* と略す。

- (4) *Ibid.*, p.95.
- (5) *Ibid.*, p.96.
- (6) *Ibid.*, p.96.
- (7) *Ibid.*, P.97.
- (8) *Ibid.*, p.97.
- (9) *Ibid.*, P.98.
- (10) *Ibid.*, p.105.
- (11) *Ibid.*, p.102.
- (12) *Ibid.*, p.105.
- (13) Matthew 5: 3,4. (前述)
- (14) Psalms 12: 2,3. (Authorized King James Version) による。
- (15) Matthew 6: 24. (Authorized King James Version) による。

- (16) *M.O.M.* p.111-112.
- (17) *Ibid.*, p.109.
- (18) *Ibid.*, p.121.
- (19) *Ibid.*, p.122.
- (20) *Ibid.*, p.124.
- (21) *Ibid.*, p.124.
- (22) *Ibid.*, p.96.
- (23) *Ibid.*, p.127.
- (24) *Ibid.*, p.118.
- (25) Luke 10: 13. (Revised Standard Version) による。
- (26) F.B. クラドック. 宮本あかり訳 「現代聖書注解ルカによる福音書」
(日本キリスト教団出版局) p.242.

参考文献

- Coale Samuel Chase. *Mesmerism and Hawthorne*, Tuscaloosa and London: The University of Alabama Press, 1998.
- Mccall Dan. *Citizens of Somewhere Else*, Ithaca and London: Cornell University Press, 1999.
- Fossum Robert H. *Hawthorne's Inviolable Circle: the Problem of Time*. Deland Florida: Everett/Edwards. Inc.,1972.
- Abel Darrel. *The Moral Picturesque*, West Lafayette, Indiana: Purdue University Press, 1988.
- Easton Alison. *The Making of the Hawthorne Subject*, Columbia and London: University of Missouri Press, 1996.